

異議あり！現代の王政復古！

明治維新 150 年祝賀、2019 年新天皇即位、2020 年改憲の道は戦争の時代への回帰だ。

2018/1/5

郵政ユニオン長崎、中島義雄

1、はじめに

今年を明治維新 150 年として祝賀行事が始まる。国は明治維新を日本の近代国家の起源として「明治の精神に学ぶ」とするが、この歴史観に異議がある。

2018 年の明治維新 150 年祝賀、2019 年の新天皇即位と改元、2020 年改憲の道は、明治の戦争の時代への回帰であり、これは平成維新の現代の王政復古（クデター）である。われわれ労働者・国民にとって近代、現代歴史の原点は明治維新ではなく、1945 年に再生した新しい憲法をもつ非戦と国民主権の日本であるからだ。

2、明治維新と戦後の平和憲法

明治維新は政治権力が最下層の働く人に移行していない意味でいえば革命ではない。明治の新政府は、政治的には徳川将軍が大政奉還をして、政権が天皇、公家、下級武士へ移ったに過ぎず、そこには最下層の農民は、多数派でありながら維新の政変劇のらち外であり、主権も付与されなかったからだ。王政復古とは文字通り歴史の反動のクーデターで、ここでは「神武創業への復古（宣言文から）」であり、これは革命とは呼ばない。

革命論で皮肉を込めていうなら、1185 年の鎌倉幕府以降、ときの天皇の後白河らの天皇は実権を失う。しかし日本史ではこれを「頼朝の革命」とはせず、政権の委譲とする。それから 676 年後の 1868 年の明治維新の王政復古は、この権限委譲の逆転であり、歴史的にいうと、ともに革命ではないとする説となる。

たしかに明治の新政府は、廃藩置県でそれまでの 290 数藩を一つにまとめ、中央集権国家を作り上げた。政治的には天皇主権ながらも帝国憲法と国会をもち、一部ながら国民に選挙権も認めた。また土農工商の身分制度を「四民平等」としたことは間違いない。しかしそれは、土農工商の江戸の身分制度を、皇室、華族、貴族、士族、平民、新平民という 6 階層の明治の新身分制度に置き換えたにすぎないし、この制度は 1945 年(昭和 20)の敗戦まで続くのである。現在こ

の士族、平民、新平民などが明記される壬申戸籍は非公開だが、書類的には現存する。

日本国民は 1945 年の敗戦を経て、1946 年に国民主権の平和憲法を手にし、あわせて女性の参政権を認めた普通選挙権により、はじめて主権者となる。並行して進んだ農地改革で農民は、不在地主の小作地から解放され、農奴から自作の農民となるのである。この結果、明治から 77 年間続いた半封建制度が終わり、自由主義国家としての非戦・日本となる。

したがって日本にとっての近代の自由主義国家の始まりは、1868 年の明治維新ではなく、1945 年の太平洋戦争敗北の結果、210 万人の尊い犠牲の上で手にした平和憲法とともにある「戦後平和主義の日本」なのである。

安倍首相や保守勢力がいう戦後体制の一掃、戦前への回帰は、この戦後の日本を否定し、明治の帝国憲法時代へもどる、天皇主権の王政復古と同義語であるからだ。私たちが祝うべきなのは、明治維新 150 年ではなく、1946 年の現代憲法発布の 72 周年なのである。

3、明治維新は自由主義革命とはならず

1848 年に始まる嘉永年間といえば、歴史好きな人にはすぐわかるが、幕末の始まりのときである。嘉永 6 年（1853）にアメリカのペリー米海軍司令官が浦賀沖に来航し、日本に開国を要求した。老中首座の阿部正弘はアメリカ大統領の親書を受け取り、国を開く。ちなみにときの将軍・家慶はこの混乱時に死亡し、不在であった。

しかし、開国は徳川幕府と封建制度崩壊の始まりであったが、自由主義革命とはむかわず、天皇主権の大日本帝国（半封建主義国家）と変質する。

明治新政府を見てみる。事実、国会ができ、1890（明治 23）年に第 1 回目の選挙が行われる。しかし選挙権は 15 円以上の多額納税者＝富裕層（地主階級）に限定され、有権者は 45 万人で、全人口の 1%ほどの大地主にしか認められなかった。したがって当選者も大半が地主出身者であった。また全人口の 95%を占める農民は、主権も選挙権もなく、不在地主の農地に縛られる小作農民＝農奴であった。おりから始まる産業革命で生まれる労働者も、一切の基本的権利を否定され、労働組合も半ば非合法化状態で、極少数派だった。これも戦後の 1946 年の平和主義と基本的人権保障の憲法からすべてが始まるのである。

なぜこうなったのか。

それは明治維新の志に幕府打倒の目標はあったが、次に来る国家像に、欧米諸国の革命の担い手（資本家、労働者、農民）が持つ自由主義革命思想がなか

ったからだ。しかしだからといって、幕末期に農民や新たに生まれつつあった労働者が、幕府や新政府とたたかわなかったことではない。

4、農民の抵抗と幕府の崩壊

徳川時代の268年間で、最大の争乱期は、幕府崩壊の幕末期をのぞけば、1871年からの天明年間の大騒擾期だろう。この数年来、日本は台風、長雨の自然災害で、西日本全体が大凶慌となり、また浅間山の大噴火で、東日本の農作物が全滅することが重なり、日本は国中が大飢饉となった。

江戸や大坂では打ちこわしで、多くの米問屋などの大店が襲撃され、数日間も無政府状態となり、また地方の農民一揆も多発する。その数は1781年からの天明年間の8年間で、実に62回の一揆が起きていることからわかる。経済的にいえば、自由経済(規制緩和)を志向した老中の田沼意次の失政があげられるが、いわゆるバブル崩壊が起きたことが大きい。この経済政策の破たんから農民、町民の反乱に対して幕府は、火盗改め役に長谷川平蔵を任命し、これを弾圧した。テレビの「鬼の平蔵」の時代劇だが、本物は盗賊も捕まえただろうが、真の狙いは反乱者=町人取締り目的の悪役だった？これが史実だ。

そして幕末期。

1848年(嘉永元年)から幕末までの20年間は、日本をして700年来の歴史的な大転換の年だ。ここで日本史は長い中世・近世を脱し、近代へと扉を開く。そこでこの原動力となった農民一揆を、この幕末期の23年間で見てみる。全体では125回が起きているが、維新前後の6年間(慶応元年から明治3年)だけを見ると92回と激増する。

農民一揆とは現代風にいえば働く人の争議である。米や物の生産量が減ることは間違いない。徳川幕府崩壊の遠因は財政難だが、これは米を基礎とする財政の時代だから、一揆の影響もより強い。全体としては、外圧としての産業革命の変革の波に、中世的・封建社会経済体制が対応できず、幕府は仕組みの転換が求められた。しかし幕府は(天皇もふくめ)海禁の鎖国継続、攘夷(外国船の打ち払い)に固執し、転換が遅く、さまざまに行き詰り、結果、江戸幕府と封建社会制度は崩壊していく。

なぜここで幕末期の始まりを嘉永年間としたのか。それは1853年のペルー来航やロシア軍艦によるプチャーチンの長崎来航(通商要求と北方領土確定交渉)という、まさに日本が有史以来の大変事=鎖国が開国か、植民地か通商か、あるいは戦争か平和かの選択が迫られた「有事」の始まりが、この嘉永年間に起きているからだ。

5、1848年の世界（欧州）革命

この1848年は日本の転換の始まりであったが、世界史的にも大激変の年であった。ある意味、世界史の中でも一～二を争うほどの激動期であった。

世界の近代史における最初の自由主義革命は1776年のアメリカ独立革命である。これこそ近世を長く支配した構造=君主制を否定する革命であり、これが1789年のフランス革命へと連動する。この過程はアメリカ独立宣言文に強い影響を与えたとされるトマス・ペインの「コモン・センス」と、同じくフランス革命に強く影響を与えた「人間の権利」に詳しい。ペインは「人間は本来天地創造の秩序においては平等であった。・・・これまでの王冠をかぶった悪党全部よりも、一人の正直な人間のほうが社会にとってはずっと尊いのだ」として、君主制のイギリスからのアメリカの独立革命の大義を語り、「人民は王政を否定し、自らの政府を作る権利がある」とする。

しかし、次のフランス革命=第一共和政は、ナポレオンにより打倒される。そしてそののち、この1848年2月の自由主義革命で、フランスは第2共和制となる。そしてこの革命の波は瞬く間に全欧州へと波及し40近くの都市や国家で、自由主義革命の嵐が吹き、多くの王政が打倒される。まさに、封建制社会が自由主義社会にドミノ倒し的に転換した近世から近代への転換点=区切りの革命の年こそ1848年なのである。

このころの欧州やアメリカの自由主義革命の担い手は市民（ブルジョワジーと労働者）であった。ところでこの1848年はもう一つの世界史の幕が開く。この年にカール・マルクスが30歳にして「共産党宣言」を書いたのだ。これは全欧州の共産主義者同盟の公然たる登場と、「科学的共産主義の最初の綱領的文書」であり、まさしく共産主義が社会に認知され、労働者が社会主義革命の担い手として、歴史に名乗りを上げたことの証明なのである。

しかしこの欧州革命=自由主義革命で労働者は大きい勢力ではあったが、革命の主人公ではなかった。また社会主義が目標ともなりえなかった。マルクス自身も資本主義の発展の未成熟と労働者の未熟さ知り、これらがブルジョワ革命であることを承知していた。事実、この2月革命に赤旗を掲げて参戦し、それを担ったはずの当時の労働者の政治的な力はまだまだ弱かった。この革命の直後のフランス総選挙では、ナポレオン三世が全体の75%の547万票を取り、第二共和国の大統領につく結果からもわかる。このときの社会主義者の候補者の得票はわずか3万票であったことがこれを示す。これから労働者が社会の主

人公として、全ての権利を手にするためには、1917年のロシア革命まで69年間も待たなければならなかった。

以上、日本と欧州は二つの1948年を経て変わる。大事なことは、ペリーやブーチャー来航の個別的な事件で日本は開国したわけではなく、この米・露ほかの西洋諸国の開国要求と日本来航という、ともに産業革命と植民地化、帝国主義時代への幕開けという波の到来が、日本を変えたのである。結果的に徳川時代の日本の長い海禁策の中でも、日本は政治的にも経済的にも、世界と同じ流れになったことと、坂本竜馬とか西郷隆盛とかの幕末、維新の英傑の個人的思想、活躍により、日本の明治維新があったとする英雄史観は誤りである。

6、王政復古（クーデター）と天皇制の確立

そして日本は明治維新を迎える。1868（慶応4）年9月に明治と改元した。流れをいえば、その前年の1867（慶応3）年10月に徳川の15代将軍の慶喜が大政奉還を宣言し、将軍職を辞し、12月9日に王政復古の宣言が出て、日本は天皇の国家となる。その翌年の1868年3月14日の戊辰戦争の中、江戸城の無血開城となり、徳川幕府が終わる。その翌日、天皇政権が目指す国家が、五箇条の誓文として布告される。当初のそれは「広く会議をおこし、万機公論により決すべし」とする、参議などによる協議体政治であった。

軍事クーデターでの王政復古の宣言文は、政権奪取後の天皇制の正当性を主張する。初めに「徳川内府、大政返上、将軍職辞退があった。・・・そもそも葵丑（1853年のペリー来航をさす）以来、未曾有の国難は衆庶の知る所だ。・・・即今、まず諸事、神武創業に始にもとづき・・・おのおの勉励し、尽忠愛国の誠をもって奉公いたすように」とある。歴史を2500年も昔の神話の時代に戻すとしたのだ。

とはいっても実権を手にした天皇と新政府には力がなかった。経済的実態は徳川家（幕府）の石高700万石に比し、天皇、公家は10万石に過ぎず、比べようもないほどだった。また存在感としても鎌倉時代以降、江戸時代までの天皇は、宗教的、政治的、経済的、軍事的な実権もなく、民衆にとっては「誰？」という存在でしかなかった。

1868（慶応4）年9月8日、新政府は慶応を明治と改元し、天皇が京都から東京へ向かう。そのとき政府は天子様（当時の天皇はこう呼ばれていた）の名で東京の町民へお酒を3000樽も振る舞い、江戸の町はお祭り騒ぎであった。明治維新の天皇は、酒で人気取りを行ったのである。

また長州藩の政治的な工作とされる「ええじゃないか踊り」は、京都や大阪の街を騒然とさせ、討幕軍の京都入城＝クーデター蜂起の隠れ蓑とされた。また江戸時代に流行った「お伊勢参り」は、天皇制確立の道具ともなる。もともと伊勢神宮は農業の神で農民の信仰心を集めていた。伊勢参りのお土産は米の新種（伊勢錦）の種モミであったことから、これで新種の農業（稲作）が全国に広がったともされる。先の東京入城からの帰りに天皇は、この伊勢神宮に参拝し、天照大神以来の天皇制の神社と宣伝する一方、廃仏毀釈による国家神道を作り上げ、宗教的地位を確立する。

また軍事的には新政府軍の直属の軍はまだ確立されていなかった。実態は西国雄藩の軍事力に依存していたが、戊辰戦争以降の一年の内乱は、佐賀藩がもつアームストロング砲が決め手となり、幕府軍を打ち破る。新政府はこの討幕軍に軍人勅諭を發布し、天皇ための「忠君愛国の軍」の組織を作り上げる。

また財政的には京や大阪の豪商からの借金や、幕府側諸藩の戦争責任の処分（徳川家 640 万石没収、その他 25 藩の 108 万石没収など）と、各藩の版籍奉還、秩禄没収などによる臨時収入などで基盤を確立していく。しかし維新のスローガンである「御一新」や「世直し」には税の軽減が公約であったが、しかし徳川幕府の重税での一揆多発という社会的背景があるなか、新政府もそれに代わる重税からの脱却の策は出せなかった。明治初期に反政府一揆が多発する状況は、農民の維新への不満を証明する。

「廃藩置県」（中公新書、松尾正人）によれば、江戸城無血開城は、將軍慶喜に死罪一等減、徳川家の石高 9 割減で和解したとする。新政府軍側にも江戸城での軍事衝突の始まりは、町民 100 万人を巻き込んだ争乱ともなる。そしてその一方で、農民の「世直し一揆」が農民戦争への転化すらあったとして、討幕軍と徳川軍の部分的軍事衝突という域を超えて、内乱化する危険性もふくめ、妥協がなされたのだともある。その背景は王政復古による世直しを期待する国民がいる一方、新政府にはその余裕がなく、国民は失望していく。その過程は島崎藤村が書いた「夜明け前」の青山半蔵の期待と失望の死に表れている。

7、なぜ明治維新は自由主義国家とならなかったのか

維新の明治政府は、農民や町民(労働者)のめざす国であったのか。否である。明治時代とは確かに 290 数藩の連合国家が統一され、中央集権国家となったし、四民平等としての身分解放もされた。しかし、農民や町民は市民（ブルジョワと労働者）として成長をしていなかった。

全国民の95%の農民は主権者ではなく、選挙権は15円以上の多額納税者のみ(全体の1割ほどの富裕層、不在地主のみ)とされ、生産の担い手であるはずの農民も小作地をもたない農民で、半農奴状態のままであり、実態は半封建制度の社会であった。

羽仁五郎が書く「明治維新史研究」によれば、明治6年の人口構成では、全人口が3300万人で、華族(旧大名、公卿)300人と貴族(伯爵など)と旧武士の士族、僧侶などが150万人で、全体の5%を占めていた。一方、フランス革命期の支配階級の貴族の比率は全人口の0.5%にしか過ぎない。圧倒的に日本の武士階級の存在と影響が大きかったことは数からもわかる。これがのちの明治以降に官僚、下級役人、軍人、警察官となり、旧身分制度をひきついで「天皇の官吏」としての「官尊民卑」社会の日本となるのだ。

明治維新を自由主義革命とできなかったもう一つの理由は、資本主義=産業革命の発展の遅れがある。ブルジョワジー(資本家階級)が育っていなかったし、明治維新の改革の担い手となりえなかったからだ。当時は、西の国(欧米諸国)から見て、地球上の一番東=最果ての国、日本まで植民地化の波が押し寄せてきたが、日本は世界史的にも遅れて始まる産業革命と近代化であったのだ。

この遅れを取り戻すべく、当時の実業界のトップの渋沢栄一は、大阪紡績会社を立ち上げる。官営企業でない、民間株式会社の設立である。イギリスの蒸気機関で稼働する紡績機械を備え、昼夜二交代制の会社で、生産性を飛躍的に伸ばし、日本紡績工業を世界的レベルとした。その成果で渋沢は日本産業革命の祖、資本主義の父ともされる。

渋沢自身は農民の出であり、武士階級ではなかったが、のちに幕臣となり、維新後は民間人に転じ、第一銀行や主だった大企業の多くを作り上げた人である。幕末に幕府の訪欧団に同行し、西洋の進んだ資本主義を目の当たりにして、帰国後、財界人となったのである。彼は民間経済の遅れを、日本の社会に根づく、儒教的思想の「金儲けの商業者を軽蔑する社会」と「官尊民卑の国」を理由に挙げている。事実、民卑のうちの商は身分制でいうと土農工商の最下位の序列でもわかるし、官尊では官の大半が元武士階級の士族が(官僚、役人の75%は士族出身)占めたからだ。

ともあれ明治政府は富国強兵、軍事大国で脱亜入欧を目指し、アジア侵略へとむかう。しかしこの明治維新の誤った国の政治、軍事が1945(昭和20)年の太平洋戦争での敗北(国の破滅)とつながったと、「明治維新序説」を書いた毛利敏彦(大阪大学教授)は書く。事実、当時でも昭和の初めの大正デモクラシー期までは、自由民権運動や非戦派、護憲派は存在したし、闘いもあったわけで、戦争とは別の道も模索されていたからだ。

8、立憲君主の憲法と国会

明治維新の基本は王政復古と廃藩置県であるが、政治、経済、律令（法と刑罰）、軍事、教育、文化の社会形態は西洋化が手本であった。そのために幕府派遣団や新政府派遣団として、多くの若者（青年や女性）が欧米へ派遣されて学んでいる。この留学から帰国した人たちの知識と力により、明治新政府は作られていくが、その大半は武士階層の子弟であった。

明治初期の大学と国語学問の成り立ちなどの歴史は「日本語を作った男」（東京帝国大学教授の上田万作の著）に詳しい。上田は江戸時代の漢文から明治の和文への転換、言文一致の国語教育を提唱したトップ官僚であるが、それによると、当時の東京帝国大学の授業の大半は英語で行われていたというほど当時の知識人は英語ができて一人前の世界であった。このように日本の若者は語学的には西欧化には成功したが、この政府派遣団として欧米で学び、後に官僚となる若者たちは、一番大事な国の原点＝「国民主権」と「市民」を学んで帰らなかった。当時の知識人の福沢諭吉ですら国民を国人と書いているからだ。いわんや市民など意識の外だったのだろう。

彼らが渡った 1860 年代の欧米は、全欧州の自由主義革命からわずか 10 数年のうちである。革命に成功し、全欧州が大高揚期にある真只中である。人民が君主制を打倒し、国民主権を手にして、「自由・平等・博愛」の自由主義国家の共和国を、あるべき国家像の基本として、世界に広げた時代。これが当時の欧米だったのである。日本の訪欧団がこの共和国制度を見聞しないはずはないし、また現実の内閣や憲法を理解できないはずもない。革命の基本は「主権者はだれか」であるが、日本の訪欧団の興味は違った。それもこれも多くの留學生の出身階層が下層とはいえ、武士階級であったことが大きいし、儒学と国学しか学ばなかったものの思想的貧しさからだ。

日本は一方で、この欧米の国々からの外圧により国を開き、ただひたすら近代化と西洋化を目指した時代の、まさに目標の国々である。単に語学や経済を学ぶだけで、彼らは欧州やアメリカへ渡ったのだろうか。このとき、徳川の封建制社会の中で育ち、学問といえば幕府の学問所で教えた儒教や朱子学、そして江戸後期に出てくる国学しか学んでいない武士の子弟では、支配階級の論理のみの視点で、欧州を眺めたことは想像に難くない。

これを裏返して言えば、彼らの明治維新には、儒学による佐幕派、あるいは国学による尊王派の違いはあるが、ともに海禁の攘夷しかなかった。そこには当時の世界、産業革命と自由貿易、植民地支配時代の思想の根底の「自由主義革命」という思想がなかったことの証明でもあると思う。

その彼らの頭には、国民や市民という存在も、またそれだからこそ国民主権などという自由主義国家の原点は完全に欠落していた。これが明治維新政府の最大の弱点であり、天皇制を頂点とした大日本帝国の復古的なスタートを許した時代背景とあってよい。

明治の帝国憲法発足前後について、明治初期の法務官僚で、東京帝国大学教授で後の中央大学を作った穂積陳重は、その著「続、法窓夜話」の「憲法という話」の項で、明治帝国憲法を起草した伊藤博文との関係で、「かくて国会開設が発せられて、憲法制定は一刻も猶予ならないときにきて、明治 15 年、天皇が参議の伊藤に『欧州各国の立憲を学ぶべし』として詔を下す。こうして伊藤は自身 3 度目となる西欧への留学、視察の旅へでて、のちに帰国した伊藤は、「わが国体に適合する憲法を編集することとなった」と書く。このとき伊藤から相談のために文書を見せられた穂積は、その第一条に「欧州各国の立憲君主の憲法を研究すべきこと」とあったとも書いている。

伊藤の個人的資質だけをいうわけではないが、彼は、1863（文久 3）年に長州藩によりイギリス留学を命じられて出国し、学んでいる。二度目が 1871（明治 4）年の岩倉視察団の一行として 2 年近くの欧米旅行をしている。3 度目が、この立憲制憲法づくりの視察の旅であったが、結局、彼はこの 3 度の旅で 10 数カ国を回っているが、国会と憲法問題では、ドイツ（プロイセン）のビスマルクの君主主権論にたつ独裁制を日本に導入することとなる。このときアメリカ、フランスは王政ではなく共和制である。最初の留学先で一年も滞在し学んだイギリスも、王政はあるが「君臨しても統治せず」の象徴制である。伊藤はこの先進三国の憲法を受け入れなかった。そして国民主権・自由主義の「1848 年欧州革命」を学ばなかった伊藤の思想性=歴史観が、帰国後、日本で明治の帝国憲法を起草させ、国会開設には初代の総理大臣につかせ、その後の朝鮮侵略では初代の総督につかせて、以降、戦争の時代の日本史としたといってもいい。

9、明治期の労働者の運動

1848 年（嘉永 6 年）にマルクスが「共産党宣言」を書き、世界に社会主義を掲げる共産主義者同盟ができる。世界史で初の科学的社会主義を説く唯物史観の思想が語られる。今から 170 年前のことである。

ではこのころ、日本の国民（労働者、農民）はなにをしていたのだろうか。幕末期の 1864 年（元治元年）年に長州藩が下関で欧米と戦争をしている頃、後の初代首相となる伊藤博文は井上馨らとともに欧州留学へ派遣されているが、この

年に欧州では第一次インターナショナルが結成されている。世界で初めての社会主義者の国際組織であるが、伊藤ら多くの留学生らはこれとは交差していない。

日本に労働組合と社会主義思想が入ってくるのは明治の後半である。生活のためにアメリカに渡り働き、労働組合を学んだ高野房太郎などが帰国し、明治30年の1897年に労働組合期成会を作る。これが日本初の労働組合である。

当然ながらアメリカ型（非社会主義、共済組織）ではあったが、彼らは日本の労働運動の先駆者として活動をする。高野は「日本における労働運動」で「労働運動とは私の理解するところでは、労働者が自らの利益を守り増進するために、労働者自身で行う組織的な努力です。この意味での労働運動は、残念ながら日本には存在しません」と1894（明治27）年に書き、労働組合建設の必要性を説いている。これが労組の始まりとつながる。

その期成会結成の翌年の1898（明治31）年、同じくアメリカから帰国した片山潜や幸徳秋水らが社会主義研究会を結成する。社会主義思想の始まりである。その片山は「日本の労働運動」の序論で、「人民は沈黙し、あえて語らず。余は小者のために大者に向い、語らん」として、労働運動を祝し、その必要性を説いた。片山はその後できる第2インターナショナルの日本の代表として本部委員に任命されている。1900年（明治33）のことである。

その後、1901（明治34）年に片山潜らが社会民主党を結成するが、即日、結社禁止となる。また1903（明治36）年に堺利彦や幸徳秋水らの訳で「共産党宣言」が日本初として平民新聞に掲載される。しかしこれも発行禁止となり、堺と幸徳らは起訴される。また1906（明治39）年に日本社会党ができる。堺利彦や片山潜らが理事となっている。なお日本共産党はこれから遅れて1921（大正10）年の発足である。

このころの内務省の数字として歴史に残るのは1911（明治44）年に「このころの社会主義者は944人、準社会主義者も981人」という記事が「社会労働運動大年表」にある。だが1910（明治43）年の大逆事件で、秋水ら12人が死刑となり、社会主義運動は大弾圧下にさらされる。この事件は、天皇襲撃の計画だけの未遂事件であり、しかも秋水らは計画にも関与をしていなくて冤罪であったとする説もある。当時、新聞社に勤務していた歌人・石川啄木はこの事件の調書をすべて読み、「秋水の無罪を確信した」という。このことから啄木は社会主義者になっていったというが、無念にも若くして病死する。そしてこの後も日本の社会主義者と労働者は、3.15共産党大弾圧や治安維持法などで弾圧をされるが、戦時中もたたかいつづける。

10、今年はマルクス生誕 200 年と国際的な社会主義運動

今年 2018 年はマルクス生誕 200 年である。1818 年 5 月 5 日にドイツで生まれたマルクスは 23 歳までボン大学とベルリン大学などで哲学を学び、卒業後「ライン新聞」で働き、エンゲルスと出会う。先述したように、マルクスは「共産党宣言」を書き、「世界の労働者よ、団結せよ」と呼びかけた。さらにマルクスは 1867（慶応 3）年に「資本論」を書き、その革命思想のためにドイツ、フランス、ベルギーなどの各国から国外追放処分を受け、イギリスで生涯を過ごし、無国籍者となり、1883 年 3 月 14 日、ロンドンで亡くなっている。65 歳だった。

このマルクスの死について友人であるエンゲルスは、「人類は頭一つだけ背丈が低くなった。しかも人類が今日もっていた最も大きい頭だけ。プロレタリアートの運動はさらに前進を続けるが、その中心がなくなった」と悲しみの言葉を残している。世界史的にいえば、マルクスの評価は、ダーウィンが生物界の発展法則を発見したように、マルクスは人間の歴史の発展法則を発見したことに尽きる。その思想はいまもなお、学ぶことが多い。

国際的な社会主義運動でいえば、第一次インターナショナルの結成宣言文を書いたのはマルクスである。しかしこの組織はその後のドイツとフランスの戦争のとき、それぞれが自国防衛で対立し、破たんする。12 年間の組織だった。そして、この反省の上に 1889 年に第 2 インターナショナルが設立され、翌年に世界的に初めてのメーデーが行われる。しかし 1914（大正 3）年に始まった第一次世界大戦で、再び各国の利害が対立し消滅する。そして 1917（大正 6）年のロシア革命で、1919（大正 8）年に第 3 インターナショナルができる。ソビエト共産党の指導の下にできた世界組織で、後にコミンテルンと呼ばれるが、これも 1939（昭和 14）年の第二次世界大戦勃発で対立し、三度崩壊する。

この経過の中で、1924 年に労働者社会主義インターナショナルがイギリスでできる。今でいう社会民主主義だが、1914 年の第 2 インターナショナルの崩壊ののちに作られた組織である。社民である以上、当然のちのコミンテルンと対立を深めるが、これも同じように第二次世界大戦で内部の利害の対立で、組織は崩壊する。

そして戦後の 1951（昭和 26）年に社会主義インターナショナルとして再発足をやる。これが現在も続く、社会主義の国際組織（150 ヶ国をこえる組織が参加）であるが、日本では社会民主党が加盟しており、福島瑞穂参議院議員が副議長を務める。また世界の共産主義運動は、共産党、労働者党の国際会議があり、日本共産党が参加しているが、いわゆるコミンテルンとは異なり、緩やかな組

織形態だという。以上がマルクス以降の社会主義の国際的な運動と組織の経過である。

経過と流れは、いまも社会主義インターと共産主義の国際組織の対立は続き、組織統一はできていない。また日本でも戦前の社会民主主義（労農主義）と共産主義との対立は戦後も続く。一言でいうならマルクスが共産党宣言でいった「世界の労働者よ、団結せよ」にはなっていない。

11、最後に

そして2018年を「明治維新150年」として祝い、いまこそ明治への回帰とする日本がある。来年2019年（平成31）で平成を終え、新元号のもとで新天皇を（神として）即位させ、2020年に改憲をなし、究極的には明治の帝国憲法時代を目指す。そこは主権を国民から天皇へと返上させる狙いが潜む、平成の王政復古劇の歴史的な反動史観なのである。明治150年祝賀から改憲までの数年間は、こうした闘いの渦中となる。

2019年4月30日（水）に現在の天皇が退位し、翌5月1日に次の天皇が即位する。政府はこの日を祝日として、4月27日から5月6日までの10連休とする、という報道が出ている。

明治維新のとき、700年ぶりの天皇の登場に、「天皇って誰」という国民の意識のなか、新政府は江戸の100万町民に酒樽3000個を配り、天皇の江戸城入城の祝賀とした。貧しい人々はこの大盤振る舞いで酒に酔いしれた頭で、「天皇の存在」を知ったのだ。

そして現代。日本史上初の10連休法で、国民に天皇制での実利感を与えるためのアメを振る舞い、祝賀行事への参加を求めてくる。10連休法は仕事からの解放で、慰労ではある。労働者・国民が騒ぎに取り込まれる可能性も高いが、一方で全労働者の4割とされる非正規雇用は時間給である今は、実質賃金の3分の2が減るのだ。素直に喜べない。

それともう一つ、5月1日は労働者の祭典・メーデーだ。世界的には1889（明治22）年の第2インターの再結成と、翌年にはメーデーが世界的に行われた日でもある。

日本では現在、GWの事情から4月にメーデーを開く連合もあるが、全労連と全労協は1日に開いてきた。今度は天皇の即位の日となる。天皇即位祝賀か、メーデーかで苦しい選択を迫られる。この言葉が正しいかどうかはさておくが、この選択は思想性としてもまさに労働組合の正念場。「天王山」だ。

新天皇即位と一世一元の法で5月1日から新元号となる。元号はまだ決まっていないが、この年を後世の歴史としては「平成維新」呼ばれる時代転換となるかもしれない。

最後だ。思えば、明治維新の1868年から日中戦争と太平洋戦争の敗北までの77年間は、文字通り、戦争と戦争に明け暮れる時代だった。ほぼ10年おきに侵略戦争を行った時代こそ、明治維新の富国強兵と軍事大国路線の帰結であった。そしてこの戦争の敗北と国家破滅も、この路線のまた必然であった。太平洋戦争だけで210万人の国民が戦争で殺された時代と、アジア諸国への侵略で2600万人という多大な犠牲を強いた加害の歴史をもつ日本が、戦争の時代の明治帝国憲法時代に回帰する「明治維新祝賀」の歴史観と政治路線など到底、認めがたい。わたしたちは戦後の平和国家・日本の歴史観で生きていく。